

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 書誌(書物同好會編輯)   |
| Sub Title        |   |
| Author           | 山口, 昌(Yamaguchi, Akira)   |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1926  |
| Jtitle           | 史学 Vol.5, No.1 (1926. 3) ,p.145- 146  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 書評  |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260300-0146">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260300-0146</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書評

### 鑑鏡の研究(梅原末治著) (大同山書店發行)

本書は「古鏡の研究」の著者故富岡謙藏氏の七周忌を記念するために、氏と師弟の關係ある梅原氏が、かつて公にしたる論文に補訂を加へて公刊せるものであつて、その序文にも言へることく、富岡氏の生前樹立したる鑑鏡の年代觀を更に新出の資料によつて祖述修築することを志したのであるから、この意味において富岡氏の著書と姉妹書の關係をなすものといふことができる。従つて富岡氏の年代觀の一部に對する諸學者の異說に對して、いたるところこれが辯護と論戰とにとめられた、鏡の研究に新生面を開いたものである。例へば中山博士が所謂王莽鏡の形式の行はれたる期間を短く限り、方格規矩四神鏡即ち王莽鏡と斷ずる見解、或は高橋博士が漢代鏡中單に王氏作鏡の銘あるものを王莽鏡と前提して、其他の神獸畫象鏡に王氏作鏡とあるものも同様當代のものとする見解の根據薄弱なる所以を種々の方面から論證し、むしろそれらは漢末魏晉の時代に、比定すべきものなることを主張された。しかしながら本書の特色は單にその年代觀においてばかりではない。富岡氏の著書にみられなかつた朝鮮出土の古鏡の研究やまた古鏡研究からひいてわが古代文化に論及せる點も注意すべき

ものである。この點において最も興味あるものは、附録の「考古學上より觀たる上代日鮮の關係」であつて、これは通俗的講演の要項ではあるけれども、氏の考古學研究より得たるわが古代文化の綜合的觀察をみることにでき、この方面に對して多くの示唆を興ふるものである。その要旨を紹介すれば、石器時代の我々の祖先は朝鮮半島の民衆と共に同代の文化状態にあつたが、隣邦支那の漢民族の發展につれてその文化の影響をうけ、銅鐸、銅劍、銅鉞などの遺物の示す文化が朝鮮を経て内地に傳はり、畿内を中心とする銅鐸の盛んな製作となつて、その地域から遂に前方後圓墳なる墓制に依つて代表せらるゝ國家が成立するに至つたといふのである。

要するに鑑鏡の研究はそれ自身工藝美術史の上に重要な地位を占むるのみならず、その製作年代、その出土分布、その圖樣等が、文献以外に遺物のすくなきわが古代の文化研究に對し、特に至大の貢獻を興ふるものであつて、最近これらの研究によつて大問題が提起され、學界に大論争を惹起したほどであつた。本書は古代史研究者にとつての必讀の書であつて、近く公刊されようとする同氏の銅鐸の研究と共に、わが學界を飾る近來の快著といふべきである。(松本芳夫)

### 書誌(書物同好會編輯)

書物を愛して讀むもの會として、書物同好會はその機關雜誌として「書誌」第一冊、第二冊が發行せられてゐる。第一冊では口

繪として、(一)八五五年刊和蘭植民大臣より同國王に呈した報告會の口繪「出島蘭館の中に見た長崎港」(二)一五六一年サラゴサ版西譯耶穌會士書翰集の扇を載げ、内容主なるものは書物の堆積、姉崎正治、アリチツジ、ムジヤム圖書陳列目錄並解題、植松安和蘭集の燒残り書目錄、布相永太郎等があり、第二冊に於ては、口繪(一)神宮文庫本古事記裏書、(二)モラエス氏の著書七種があり、内容は、ケンフェル日本誌の邦譯に就て、吉野作造、神宮文庫本古事記裏書について、植松安、津輕藩の北邊警備に關する資料に就て、中道等、日本演劇史研究資料につきて、波多野賢一、メンアス・ピント雜考、ウエンセストラウ・デ・モラエス、日本に關する米國書の内容、關野真吉等であり、本誌も二三難すべき點あるも、愛書家の座右に供ふべきものであらう。因に書物同好會は、毎月例會を開催してゐる。(神田表神保町一〇坂本書店發行)(一九二六・二・二六、山口昌)

### 蒲生氏郷、平將門(靈伴學人著 改造社發行)

博士の「源頼朝」は我々の何度讀み返しても厭きることのない面白い本であるが、又頼朝を知るにも最上の良書である。「頼朝」に次いで本書も普通史家のとらへることの出来ない性格を巧に描寫して、氏郷、將門の眞面目を我等の眼前に示し、生きた氏郷、將門を充分に理解せしむるものである。

蒲生氏郷に就ては、先づ相手方の伊達政宗の性格より説き初め氏郷の會津に封じられた事情に及び、更に氏郷の性格に就ては、

氏郷は法を執ること極めて嚴峻な人であつたが、他の一面には人を遇するにズバリとした氣持の好い所もあり、又自ら處すること一毫緩怠もない。徹底して「武人」の面目を保ち、徹底して「武人」の精神を揮つてゐる。然し尙一方には文雅を喜び、趣味の發達した人であつたと説かれてゐる。氏郷、政宗の關係は、大崎の一揆を中心として、餘す所なくその心理を描寫し、兩英傑の風姿を眼前彷彿せしむる。又秀吉氏郷の關係については、秀吉は氏郷を惡んだ譯ではなく、特に之を愛するには至らず聊か冷かてあつた様に思はれるとなし、秀吉が氏郷を忌んで石田三成と直江兼續の言を用ひ、之に毒茶を飲ましたなど、言ふのは實に忌々しいことである。政宗をさへ羽柴隆興守にして居る太閤が、何て氏郷に毒を飼ふ様な卑劣狭小な心を有たう。太閤はそんなケチな魂を有つた人ではないと斷じ、秀郷毒殺の俗説を否定し、最後に當時英雄豪傑は多くあつたが氏郷の如く朝鮮へ國替を願ふ様な大志を懷ひた者は一人もなく、之が實行されずに終つたことは、氏郷の爲にも、大閤の爲にも、惜んで餘りあることであると結んでゐる。

平將門に於ても實に巧にその性格を生かし心理を解剖して餘す所がない。その上、織田豊洲の辯護説にも、神皇正統記や大日本史の反逆説にも傾かず、その中庸をとられ、「族間の争ひより遂に大罪惡を犯すに至つた経路を面白く記されてゐる。元來此の平將門」は大正九年四月の「改造」に出たものであつて、荒井藤夫氏などは大にこれを推賞し、その著「平將門論」に殆んどその大部をその儘記してゐる程である。勿論平氏系圖によつて將門の父良將とした點や、將門記の讀み違ひと思はるゝ點があらうが、これが